

第6回「現代と親鸞」公開シンポジウム

戦後歴史学と宗教研究

——教科書からこぼれおちたものを「民衆」・「宗教」からみる——

主催



真宗大谷派（東本願寺）
親鸞仏教センター

芳賀幸四郎からみる戦中／戦後の 仏教史（禅文化史）を手がかりに

飯島 孝良

親鸞仏教センター嘱託研究員
花園大学国際禅学研究所副所長

皇国史観においては、室町期のいわゆる「東山文化」は禅宗と強く関係したとされるとともに、天皇と対立した足利氏という「逆賊」の武士に支えられた文化などとされ、戦中まで低く評価されることがみられた。

これを受けて、戦時中に「東山文化」論のひとつの到達というべき著作を公にした芳賀幸四郎（1908～1996）は、皇国史観では当時の文化の実像を捉えきれていない点を暗に指摘していた。そのため、戦時中までは論述するうえで苦しい立場に置かれていた芳賀が、戦後にはその立場をほぼ変えずとも——むしろ、立場が変わらなかったからこそ——室町文化が技芸を身につけた「民」によって成立した「下剋上」の文化として論じ得たのであった。こうした「民」の重視は、主体としての「民」を確立しようとしていた戦後日本の民主主義的な流れと軌を一にしていた。このとき、芳賀は旧来の国粹的な「国家」「天皇」を中心にした歴史叙述と異なる方法を模索し、「民族の生命力」に着目した文化史を構想しようとしていた。「戦後歴史学」というべき営みの中で、禅文化をはじめとした仏教的な要素は、そして伝統文化における「日本」的なものは、どのように位置づけられることとなったのだろうか。

今回は、そうした禅文化論が戦中から戦後にかけてどう評価されていたのかを見直しながら、戦後の歴史学において仏教と日本文化を研究することにどのような意味が見出されたのか、考えてみたい。そして、現代の我々が仏教と禅文化のイメージにどのように出逢ってきたのか、確かめていきたい。

（いいじま・たかよし）